

ち が き きょう りょう
千 垣 橋 梁

中部地方の
選奨土木遺産

所在地：富山県中新川郡立山町、富山市 竣工年：1937（昭和12）年
管理者：富山地方鉄道株式会社

平成 25年度登録

認定理由：常願寺川の県営電源開発事業の一環として、小池啓吉の設計により架けられた鋼スパンドレルブレストアーチの美しい鉄道橋である。



千垣橋梁と常願寺川の風景



発電所建設用資材を輸送するトロッキ、千垣付近（『富山地方鉄道50年の歩み』1979）



架橋工事中の千垣橋梁



左：同左、右：『都市富山の礎を築く』白井芳樹、2009



この形式は、Spandrel braced arch（構拱）と『小池橋梁工学』で紹介される。非バランスタイプとしては戦前最長のスパンだった。



晩年の小池啓吉
小池は千垣橋梁を手掛けているころ著書『小池橋梁工学』でアーチ橋をまとめている。

1920（大正9）年、富山県は常願寺川水系の電源開発を始める。1936（昭和11）年までには、黒部川水系を含んで7つの発電所を有し、県の一般会計へこの収益の一部が充てられるほど、成果を上げるようになる。発電所の建設工事のために、県の電気局は富山市内から山中へアクセスする鉄道が敷設された。まず1921年に南富山から上滝（常願寺川が山地から出る扇頂部）まで開通させ、そこから山間部を千垣まで順次延長していった。1937（昭和12）この延長工事の最難関だった架橋が終わる。それが千垣橋梁だった。

この橋梁の設計・施工を担当した技術者として小池啓吉の名が挙がる。小池は先に東京市において関東大震災後の復興橋梁事業の中心的技術者として活躍した人物である。1933年に富山県へ入り、1935年から電気局事務嘱託も兼務している。竣工間近の千垣橋梁の写真を撮った小池は、「常願寺川二又名所ガーツフエマシタ」とメモ書きした。

富山電気鉄道は、黒部鉄道とも相互に連絡するようになり、工事用輸送だけでなく沿川開発、立山登山の開拓にも大きく貢献するようになる。

